

武蔵野日曜集会

隅の首石

——エペソ書第2章——

1992年1月19日（武蔵野）

小池辰雄

祈り 母の生涯 自己本位の文化文明 神の下の自主自由 愛の源泉は神 キリストと共に天の処に坐っている 無限界の無限性 キリストの中に新造された者 霊的親和力 一つの御霊にあって 隅の首石

【エペソ2】

1 汝ら前には咎と罪とによりて死にたる者にして、² この世の習慣に従い、空中の権を執る幸、すなわち不従順の子らの中に今なお働く霊の幸にしたがいて歩めり。³ 我等もみな前には彼らの中におり、肉の慾に従いて日をおくり肉と心との欲する随をなし、他の者のごとく生まれながらの怒の子なりき。⁴ されど神は憐憫に富み給うが故に我らを愛する大なる愛をもて、⁵ 咎によりて死にたる我等をすらキリスト・イエスに由りてキリストと共に活かし（汝らの救われしは恩恵によれり）⁶ 共に甦えらせ、共に天の処に坐せしめ給えり。⁷ これキリスト・イエスに由りて我らに施したもう仁慈をもて、其の恩恵の極めて大なる富を、来んとする後の世々に顕さんとてなり。⁸ 汝らは恩恵により、信仰によりて救われたり、是おのれに由るにあらず、神の賜物なり。⁹ 行為に由るにあらず、これ誇る者のなからん為なり。¹⁰ 我らは神に造られたる者にして、神の預じめ備え給いし善き業に歩むべく、キリスト・イエスの中に造られたるなり。¹¹ されば記憶せよ、肉によりては異邦人にして、手にて肉に行いたるかの割礼ありと称うる者に無割礼と称えらるる汝ら、¹² 曩にはキリストなく、イスラエルの民籍に遠く、約束に属する諸般の契約に与りなく、世に在りて希望なく、神なき者なりき。¹³ されど前に遠かりし汝ら今キリスト・イエスに在りて、キリストの血によりて近づぐことを得たり。¹⁴ ¹⁵ 彼は我らの平和にして、己が肉により、様々の誠命の規より成る律法を廃して、二つのものを一つとなし、これは二つのものを己に於て一つの新しき人に造りて平和をなし、¹⁶ 十字架によりて怨を滅ぼし、また之によりて二つのものを一つの体となして神と和がしめん為なり。¹⁷ かつ来りて、遠かりし汝等にも平和を宣べ、近きものにも平和を宣べ給えり。¹⁸ そはキリストによりて我



ら二つのもの一つ御霊にありて父に近づくことを得たればなり。19されば汝等はもはや旅人また寄寓人^{やどりびと}にあらず、聖徒と同じ国人^{くにびと}また神の家族なり。20汝らは使徒と預言者との基^{もと}の上に建てられたる者にして、キリスト・イエス自らその隅^{すみ}の首石^{おやいし}なり。21おのおのの建造物^{たてもの}、かれに在りて建て合わせられ、いや増しに聖なる宮、主のうちに成るなり。22汝等もキリストに在りて共に建てられ、御霊によりて神の御住^{みすまい}となるなり。

● 祈り

第十卷『聖書は大ドラマである』の1月19日の「出エジプト」の所の聖句を読ましていただきます。

「汝ら懼^{おそ}るる勿^{なか}れ、立ちあがれ、エホバが今日汝らのために為^なし給^{すく}う救^{きう}を見よ。

……エホバ汝らのために戦い給う、汝らは静まりて在れ！」(出エジプト14・13、14)

祈ります。深い愛の御神^{おん}さま、今日は、不思議にも私の母の召天命日にあたりまして、しもべは感慨無量であります。1957年のこの日に、母は天界に召されましたが、既に35年たちました。私にとりましては、母は言葉に言うことのできない存在です。今日あるのも、お母さんのお蔭^{かげ}です。また、ここに集まっている方々も、皆、お母さんがいかに大事な存在であるかを感じておりますが、女性の存在がいかに歴史の底の力であるかを、しもべも思っております。

どうぞ、その意味において、この集会をまた、あなたがエペソ書2章を通して力強く私たちに、御言^{みことば}、御霊^{みたま}を賜^{たま}らんことを願^{たてまつ}い奉^{たてまつ}ります。天界において、母も一つであります。また、今日は、その意味において、Mさんも、Aさんも来られて、不思議に思っております。たくさんまだ祈りたいことがあります、心からの感謝と讃美、聖名にあつて捧げ奉る。アーメン。

● 母の生涯

母のことは第六卷『随想集』(1982年刊)に、「母の生涯」という文章がありますので、お帰りになりましたら、ご参考にお読みいただいたら、ありがたいと思います。389頁からです。

ちよつと簡単に申しますけれども、私はもう五つの時に父を亡くしましたので、専ら^{まづ}母に育てられた。母は明治2年生まれですから、あの頃の女の子でも、まだ学校に行かない前から、漢籍^{かんせき}を学ばされた。

「孔子曰く…」

「孟子曰く…」



というようなぐあいだ。それを暗記させられた、寒い板の間に坐らせられて。昔の教育というのはそういうものです。明治の人間には骨があるというのは、そういうことからです。私たちもそのような角度の教育を受けてきた。今は、神なき民主主義はとんでもない。いつまでたつても、神なき民主主義ではどうにもならん、日本は。

母は御茶の水の女学校の先生を20年間やって、我々を育ててくれたんですが、実に苦闘しました。その為に、過労のために終りの頃は、随分丈夫な母でしたけれども、胃腸をこわして大分弱った。そこへもつてきて、一番頼みにしていた兄貴が北京で仆れたおましたから、これはもう大変なショックで、悲しみとショックで、過労と両方で失明してしまつた。

人間が失明するということは大変なことです。私は夜、自分で目をつぶって、母がこれで目があいても光が見えないと思うと、本当に何ともいえないで涙を流した。母も本当は、一遍は自殺したかったらしい。そのことは、ただ一遍私に言いました。けれども、我々のことを思つて、そういうことはしなかつた。しかし、盲になったことを一度も、小言は言わなかつたです。

1919年に兄が――1921年に仆れましたけれども――母に「どうぞ」と言つて上げた、母に贈つた聖書が、この聖書です。

「1919年9月18日、母上様、政美」

と、扉に書いてある。母は内村先生の集会に、兄に連れられて少し行きました。内村先生や藤井先生、それから或る教会にかなりよく出席していました。兄が仆れてから、私が信仰に入つた。お母さんが外を歩くのが少し大儀になつて来たので、それで、私は1940年の9月22日、ちょうど兄の仆れた日たおを期して、ここで集会を始めた。一番個人的な理由は、母と一緒に聖書を読もうということから始まつたんです。

それで、さつき歌つた讃美歌(87B「めぐみのひかりは」は告別式の時に私の長女の清子に独唱してもらつたんですが、なるほど、今、皆さんが歌っているのを私は聞いていて――実は心の中では涙でしたけれども――これを愛唱した母の気持はよく分かります。

母は88才とちよつとで仆れた。私も、丁度、2月で88歳になるので、同じような年で、何か不思議に思っています。満88歳。丁度、母の生涯と同じところに来てしまつた。失明してからは、38年、50歳の時でしたから。ほとんど私が手を引いて、そこらこらへ行つたわけですが。藤井先生の所にも、それで出掛けて行つた。そんなわけで、後でまた、エペソ書をお話しながら、ある点では、母のことも言わざるを得ませんが。

●自己本位の文化文明

それでは、エペソ書に入ります。使徒行伝が終わつたので、ローマの牢獄で書いた、エペソ、ピリピ、コロサイをやろうと、こういうわけで始まつたわけです。今日は二回目ですから、2章をやります。一回に一章をやつていくなんて、そんな話の仕方は普通はやらないけれ



ども、私は細かくやっていくよりか、重点主義でやっていくものですから。注解書がたくさんあるが、注解書なんかあまり見ない。

「汝^{きみ}前^{まへ}には咎^{とが}と罪^{つみ}によりて死にたる者にして、死にたる者」とは、

「死んだような者、神様の前に本当に生きていない者」

ということ。「汝ら」と言っているのは、パウロは異邦人に語っている。おもにギリシヤ人です。

2 この世の習慣^{ならわし}に従い、空中の権を執^とる宰^{つかさ}、すなわち不従順の子らの中に今なお働く霊の宰にしたがいて歩めり。

「空中の権を執る宰」とは、「この世の君」といわれるサタンのことです。

「サタンの手足になつてゐる」

ということは、普通の人は知らないわけです。結局、

「自己本位に生きている」

ということが、サタンの手足になつてゐるということです。人間は本来、誰でも自己本位なんです。もう始めから「失われたる存在」なんだ、自己そのものが悪いわけではないけれども、自己が本位になつてしまつたら、自己の自覚というものが、

「神に在^あつて生きる」

ということが本当の自覚なんで、本来、神の相に造られているんですから、靈止^{ひと}というのは。ところが、「神本位」でなくて、自己本位に、主体が自己になつて、主体が神でないというのが、いわゆる文化文明の人たちです。やっている事は立派なことも結構な事もありますよ。けれども、それは相対的な善さであつて、絶対の善さは神によらなければ出てこない。

3 我等もみな前には彼らの中^{うち}におり、肉の慾に従いて日をおくり肉と心との欲^ほする随^まをなし、他の者のごとく生まれながらの怒^{いかり}の子なりき。

「我等」とは、このユダヤ人のことです。神様に対して従順でない。従順を失つたというのが、アダム・イブから始まつている。あれは神話だけれども、それは人間の現実なんだから、仕方がない。

「神話だからそれはウソだ」

と、そういうような判断をしたらダメですよ。神話の中に現実のものがちゃんと書かれてゐる。そこが神話の素晴らしさです。

同じことなんだ、異邦人であろうと、ユダヤ人であろうと、およそ人間はそういうように神様に造られながら、離れてしまつてゐる。

そういうところで、幼子^{おなな}というのはお母さんがなければ生きてゐられない。お母さんというのとは幼子^{おなな}にとっては絶対的な存在です。だから、

「幼子^{おなな}の如く」



とキリストが言われた言葉の中には、

「あのようにお母さんに絶対に依存しているというような存在に、ちょっと大人はなっていないではないか。神様・キリストに、本当に頼って動いてないではないか」

と。マルチン・ルターが、

「クリスチャンは自主の者で、何ものにも依存しない」

と言ったが、あれを間違えては困る。

「何ものにも依存しないところの自主自由なんだ」

と、ルターが言っているところの「自主自由」は、実は――これを間違わないでください――神・キリストには絶対に従属しているものなんです。絶対者に従っていることが、絶対者によらなければ動けない存在であるということが、それが本当の自主のもとになる。

「他の何ものにも依存していない。ただ神にだけ依存している」

というのが、人間の自主自由性なんだ。ところが、これを抜きにして、自主自由をやるから、みんなおかしいことになってしまう。だから、神なき自主自由は、いわゆる民主主義で、これはダメなんだ。

●神の下の自主自由

リンカーンはあの自主自由のところに、

「アンダー ゴッド」(神の下において)

と言っている。「アンダー ゴッド」を抜かしてしまっているんだ、日本人は。

「敬天愛人」

でなければダメなんだ。西郷南洲は偉いです。

「天を相手にせよ」

と言った。神を相手にせよと。本当は、相手にされているんです。

「神様・キリストに相手にされているから、それにお応えしていきましょう」

と。そこに本当の自主自由があるということです。では、この自主自由は何のための自主自由かというと、隣人に仕える為、隣人に奉仕する為です。

「キリスト者は何ものにも依存しない」

と言いながら今度は、

「キリスト者は何ものにも依存する」

と言っている。この二つの命題はその意味なんです。マルチン・ルターの宗教改革は、これを根本理念としている。

それはパウロのコリント前書9章19節の言葉からきている。

「われ凡ての人に対して自主の者なれど、更に多くの人を得んために、自ら凡



ての人の奴隷となれり。」(コリント前9・19)

「自主であつて奴隷である」

という、この言葉をマルチン・ルターは『クリスチャンの自由』で二つの命題にしたわけ
です。

「何ものにも依存しない」

ということとは、

「神だけに依存する」

ということ。その「神だけに依存する」を除いてしまっているんだ、普通の民主主義は。

絶対的な自由というものは神様からやって来ている。その自由は人を愛するためなんだ、
奉仕する為なんだ。「奉仕する」ということは。「愛する」ということです。「愛する」とは「人
助けをする」ということ。

この精神を徹底的にやった人は賀川豊彦です。賀川豊彦は素晴らしい。私は本当に、伝
記を読みなおして、参ったね。いろんな病に罹って、それに打ち勝ちながら、身を粉にし
てやっている。最後は、とうとう失明してしまった。病を三つも四つも持っている。それ
で仆れた。全部、それは愛の業^{わざ}からきている。

無教会は、何といつても、エリート連中の伝道なんです。この頃は無教会では、無教会
大学を建てようなんてやっている。すべて学問にすっかり行き過ぎてしまっている。「そう
じゃない」と言ったのが手島さんと私だよ。

「そんなことではないんだ」

と。だから、聖霊の事態になった。

「従順」という言葉が、今の人には分からない。教育がいかん。先生の言うことに本当に
従うというところがない。私たちの昔の小学校の頃は、先生はもう絶対でしたからね。また、
先生たちはそれだけの権威を持っていた。「よく遊び、よく学べ」という。

聖書の次元に、預言者や使徒たちの次元に、我々はどんどん肉迫していく。これは一番
楽しい。そして、皆さん一人一人、大事なお仕事を、使命を持つ。存在、即使命だ。何をなさつ
ていても、使命的存在ですから。使命とは、

「神・キリストを証する」

こと。それをやってください。もったいないです、これだけの福音にでつくわしいて、
ノホホンとしていたら。恐れるものはひとつもない。本当の権威はキリストへの平伏しか
ら来る。キリストに平伏さないで、

「私は霊的になった」

なんていうと、ヘタするとサタンになるから、とんでもない。傲慢の霊は、これはサタン
ですから。



●愛の源泉は神

3 我等もみな前には彼らの中^{うち}におり、肉の慾に従いて日をおくり肉と心との欲する随^{まま}をなし、他の者のごとく生まれながらの怒^{いかり}の子なりき。

「肉」というのは、肉情の肉ではない。「自己本位」のことを「肉」という。パウロが「肉」という時は、その意味がほとんど多い。自己本位の勝手な慾でもって動いている。パウロの言うとおりの「怒^{いかり}の子」というのは、神様に怒りの子ということですよ。神様の怒りというの、義の現れなんです。

「義と愛」がありまして、しかし、その「義」の中には本当の「愛」がある。本当は義と愛とは二つのものではない。現れ方で、義となったり、愛となったりする。ただ、義というの、縦の関係なんだ。

「神―キリスト」

この関係が義です。神様の御意^{みこころ}にこれ随^{したが}うのが「義」です。そうすると、神様の御意は愛の御意だから、横に流れていく。これが「愛」なんです。義が立つと、愛の横の流れがくる。これが、義と愛との離すことのできない関係です。縦の関係と横の関係。バラバラではない。しかも、「神の義」というのは、神様の愛を受けて、もうそれで楽しくてしようがない。そうやって動いているのが、義なんだ。キリストは神様の愛を受けて動いておられた。神様が、

「われ汝^{いつく}を愛しむ。お前を愛している」

と天界からキリストに言ってきたでしょ。キリストは、

「神様に愛されているように、お前たちを愛しているんだ」

と、ヨハネ伝の15章に書いてある。

すべての愛は上からくる。恋愛であろうと、夫婦愛であろうと、兄弟愛であろうと、師弟愛であろうと、友人愛であろうと、全部、本当は、愛の源泉は神から来ている。

「恋愛だけは別だ」

なんて、そうじゃない。

「恋愛否定論」なんて藤井先生は書いたけれども、藤井先生はちょっと堅いな。無教会の義は堅すぎる。そういうことではない。男女の恋愛は自然にできるようになっているんですから。それは、

「愛のものは神から来ている」

ということをお忘れているから、おかしいことになる。そんな愛し方しているから、おかしいことになる。

もう私は、何だか知らないけれども、楽しくてしようがない。そして、宇宙的なことになる。私は書斎にいても、書斎にいないんですよ。駆けめぐっているんだ、天か地かわからない。

4 されど神は憐憫^{あわれみ}に富み給うが故に我らを愛する大なる愛をもて、
そうなんです、



「憐憫は義に打ち勝つ」
あわれみ

という言葉もヤコブ書にあるけれども。とにかく、「打ち勝つ」ではなくて、義をちゃんと「包摂」ほうせつしてしまおう。「勝つ、負ける」という言葉は、本当はあまりいい言葉ではない。相手をみんな包んでしまおう。

あなた方、包むもので一番素晴らしいものは何だ？ 空気だよ。空気は何でも包んでしまっているのではないですか。そして、中まで浸透している。この「気」という世界は凄いんだ、空気であろうと。

「元氣を出せ」

なんて言っただけでね、空^{から}元氣を出したってダメだよ。「元氣」というのは、「元」^{もと}の「氣」というのは、神様の氣のことなんだ。元氣を賜るんだ。

いつも、私は現在に生きている人間だから。過去を棄てているわけではないですよ。

●キリストと共に天の処に坐っている

そこで、大事な言葉がでてくる。

⁵ 咎^{とが}によりて死にたる我等をすらキリスト・イエスに由りてキリストと共に活かし（汝らの救われしは恩恵^{めぐみ}により）⁶ 共に甦えらせ、共に天の処^{ところ}に坐せしめ給えり。

「キリストと共に活かし、共に甦えられた」

と。おもしろよ。我々はキリストと一緒に甦ったんだ。⁶ 節、これが大事です。

「キリストと共に甦えらせ、共に天の処に坐せしめ給えり」

と、凄いことが書いてある。

「我々は既に天の処に坐っている」

というんだ。

「地上にいたって、それはもう天国だ。天は、仰いでいる彼方^{かなた}ではないぞ」

と。私は地上にありながら、

「母や兄貴と、もう天界で一緒だ」

という気持を持っている。そういう二重構造^{二重構造}になっているんだ、私という人間は。二重だか、三重だか知らないけれども。非常に自由なんです。分析した考え方をしない。あなた方、もつと弾力性のある魂になってくださいよ。

この集会から出て行ってきつぱり音信しない人、こっちから便りを出しても返事もしないような人がいるよ。氣の毒になるんだ、私は。まだ狭い世界にいるんだな、と思って。こっちは開けつぱなしだからね。

過去をも全部、救いあげてしまおう。私の詩を見たら、みんな驚くよ。始末がつかないです、とても。



「この詩の理念は」

なんて、「理念」なんて有りはしない。その点で、やっぱり大きかったのはゲートなんです。「この小説は何を言っているか」

なんて、そんなことを言っているか、ゲートは。でっかいね、やっぱり宇宙的な詩人だ。ドイツでは、一番でっかいのはゲートです。

「共に甦えらせ、共に天の処に坐せしめ給えり」

と。パウロというやつは凄いよ。とにかく、キリストをのぞいて、パウロは第一人者です。こんな幅があつて、深みがあつて、鋭さがあつて、エライ構造を持つていて、大変なやつだよ、あのパウロというのは。やつぱり、選びの器だな。新約聖書からパウロをとったら、もぬけのからになってしまう。パウロの手紙は福音書よりも先に書いてあるものだから。

●無限界の無限性

このパウロが、ユダヤ教のチャンピオンだったのがひっくり返つて、これだけ鮮やかな転換をしたのに、ユダヤ人は相変わらず、

「パウロは間違つていた」

なんて言つて、旧約にとどまる。

だから、イスラエルとアラブはしつちゅう喧嘩しているんだ。イスラエルが狭いからいかんですよ、あんなことでは。アラブなんか呑んでしまつたらいい。喧嘩する必要はない。宗教の世界で、およそ戦争なんていうことは、宗教そのものに反することです。マホメットはダメだよ、剣なんか持つているから。だから、ダンテに地獄に墮とされた。あの通りだ。マホメット教の人はダンテの『神曲』を読まないだろうね、自分たちの元祖が地獄にいたのでは。おもしろいな、ダンテというのは。

ダンテも宇宙的な魂です。もう何と言つても、ヨーロッパの大詩人は、ダンテとゲートです。私はこの二人が好きだ。二人とも型がまるで違う。型が違うのを、何故、私が吞めるかという、これは聖霊だからです、キリストの霊だからです。キリストの霊だから吞めるんですよ。

私は言うべきことを、書くべきことを書くまでは、死ぬわけにはいかない。使命があるから。使命のあるところには、神様は必ず果たさせてくださる。だけれど、人間のすることは決して完成はしませんよ。未完成の完成ということ——私は「完成」と言いたくない——無限性を持つていなければダメです。やることを為すこと、書くこと言うこと、そこに無限性がないようなものはダメ。限界のあるようなものはダメ。無限界の無限性のもの。

宇宙がそうだよ。「宇宙に限界がある」と言えるですか。限界があつたら、その先はどうなんですか。人間の思惟を越えたものだね、宇宙なんていうものは。大変なものだ。それは、表現できないよ。絶言絶慮です。



仏教でも、一流のものは楽しいから、私は読んでいる。何でもみんな、キリストの光の中で読めるんだから。不思議でしょうがない。イエスというひとはケタが違う。お釈迦さんなんか、本当はキリストにはかないやしない。仏教の人には、私はそんな事は言いませんよ、

「ああ結構です」

と言います。

●キリストの中に新造された者

7 これキリスト・イエスに由りて我らに施したもう仁慈^{なさけ}をもて、其の恩恵^{めぐみ}の極めて大なる富を、来^{きた}らんとする後の世々に顕^{あらわ}さんとてなり。8 汝らは恩恵^{めぐみ}により、信仰によりて救われたり、はおのれに由るにあらず、神の賜物^{たまもの}なり。

「汝らは恩恵^{めぐみ}により、信仰によりて救われたり」

と。これも大事な言葉です。恩恵が先ですから。一体、信交^{あひまひ}は何かといえば、恵みを受けとることが信交なんだから。「しんこう」の「こう」の字は「交」(交わる)と書かなければ。仰いでいたってダメなんだ。もう、私は、仰ぐ「信仰」とは書かない。「しんこう」というのは、交わる「信交」と書く。もう、古い観念的な概念は私はのり越えていく。

「我を見し者は、父を見しなり」

というのは、キリストの信交は正に神様と交わっている世界だから。交わるどころじゃない、もう、「二つ」の世界。本当は、「信如」なんだ。「一如」なんだ。信交の「如し」では困るんだけど。この「如」という字は、「一如」というときには、「如し」という意味ではない。「二つの如し」ではない。

8 汝らは恩恵^{めぐみ}により、信仰によりて救われたり、はおのれに由るにあらず、神の賜物^{たまもの}なり。

もう完全に、パウロは、神・キリスト一切で動いているから、こういう言葉が出てくる。この「恩恵により、信仰により」というのは、

「恵みを信受することによりて救われたり」

でいい。二つのことではないですから。

「恵みを信受、受けとることによって救われたり」

と。私は翻訳するときに、「恩恵と信仰によって」なんて訳し方はしない。

「恵みを信受する」

と訳す。それはいわゆる訳ではない。パウロの本当の気持を大胆にそういう訳し方をしてやろうと思うけれども、そんなことをやっている暇はない。

9 行為^{おこない}に由るにあらず、これ誇る者のなからん為なり。10 我らは神に造られたる者にして、神の預^{あらか}じめ備え給いし善き業^{わざ}に歩むべく、キリスト・イエスの



中に造られたるなり。

「神に造られた」という言葉の後に、

「キリスト・イエスの中に造られた」

と書いてあるでしょ。私たちはキリスト・イエスの中に新造された者、新人である。パウロのこんな言葉はユダヤ人には受けとれない。

「キリストの中に造られた」

なんて。パウロは、新しく甦らされて造られて、それを彼は勝手に言っているわけだ。熾んな言葉だよ、パウロの言葉は。「造る」という字は、「創造」と書いた方がいい。創造された。

11 されば記憶せよ、肉によりては異邦人にして、手にて肉に行いたるかの割礼ありと称うる者に無割礼と称えらるる汝ら、

「肉によりては」というのは「血肉の上では」ということ。即ち、割礼のあるユダヤ人と、無割礼の異邦人。割礼があるだの無割礼だのと、一生懸命にやっているのは馬鹿らしい話だ。「割礼があつたから近い」とユダヤ人は思っているが、そんなことではない。反って遠くなくつてしまったと。

12 曩にはキリストなく、イスラエルの民籍に遠く、約束に属する諸般の契約にあずか
に与りなく、世に在りて希望なく、神なき者なりき。13 されど前に遠かりし
汝ら今キリスト・イエスに在りて、キリストの血によりて近づくことを得たり。

ユダヤ人よりか、お前さんたちの方が近づくことになったと。

14 彼は我らの平和にして、己が肉により、様々の誠命の規より成る律法を廃
して、二つのものを一つとなし、これは二つのものを己に於て一つの新しい
人に造りて平和をなし、

「平和」は間違いだ、これは「平安」です。

「キリストは我らの平安にして」

です。「己が肉により」というのは妙な言い方ですけども、肉を十字架に架けたことです。それでもつて、誠命はもう要らない。「二つのもの」というのは、ユダヤ人と異邦人を一つにしてしまった。だから、「怨の隔」は無くなつてしまった。

「二つのものを己に於て一つの新しい人に造り」

と、これなんです。だから、この二つのものを、キリストは自分で一つのものに、新しく一つの人に造られる。

「割礼があろうが無かろうが、そんなことは問題じゃないんだ」

と。キリストの十字架の贖いでもつて、律法の世界を超律法の世界に入れてしまつて、ユダヤ人もギリシヤ人も――「ギリシヤ人」というのは異邦人ということ――異邦人は誰でもあろうと、結局、人間はみんな、キリストにあつて一つにされてしまった。一つの新しい、



新人にされてしまった。

新しい人。この「新しさ」は古びない新しさです。「カインス」の方です。「ネオス」でない。古びないところの永遠の新しさ。だから、「新約聖書」は「カイナー デイアティーケ」という。新約聖書の「新」の字は、古びない聖書ということ。古びない新しさです。この世のものは皆、新しいものも古びていく。ところが、この新しさは古びない。常に新^{あら}たなんだ。御^み霊^{たま}に、ある人は常に新^{あら}たなんです。

●霊的親和力

だから、無教会信仰というのは

「私たちの信仰は」

なんてやっているでしょ。それは下向きの放物線でダメになってしまう。段々衰えていく。ところが、我々は自分なんてものではないから、上向きのカーブになる。カーブが違う。これが「常に新^{あら}た」なんです。

「外なる人は衰えていつても、内なる人は常に新^{あら}たなり」

というパウロの言葉がある。「内なる人」というのは霊のひと。御^み霊^{たま}の霊止は常に新^{あら}たである。聖霊を受けないと、聖書は読めないんです。

「これはどういう意味だ、ああいう意味だ」

なんて、一生懸命に詮索している。ご苦労さんな話だ。

だから、「平安」です。平和というのは人と人との関係。平安は縦の関係。ハッキリ、私は区別して言う。これをハッキリ言う人はいないんだ。困ったものだね。

霊的に一つにしてしまうから、キリストは、霊的化合変化を起こさせる。化学の世界でもそうでしょ。化学的变化で一つにするでしょ。ところが、これは霊的化合物。本当の「親和力」だ。キリストは霊的親和力を持っている。ゲーテの小説に『親和力』というのがあ^あるけれども、「親和」というのはいい言葉だね。いろいろな違ったような性格のものを皆ひっくるめて一つにしてしまう。聖霊は霊的化合変化を起こさせる。

聖霊に入りながら、パリサイ的だったら、本当の聖霊の世界ではない。パリサイというのは聖霊以前のものです。パウロのサウロ時代。サウロは十字架と聖霊をいただいてから、完全にキリストの親和力の中に入ってしまった。賀川豊彦がそうだったね。無教会はダメだ。その親和力を持っていない、内村鑑三といえども。差別が強い。私の言っていることが分かるね。頭で聞いていたら分からないよ、身体で聞いていないと。

「親和力」といういい言葉が出てきたな。「親和力」だ、正に。だから、

「みな、隔てが無くなった」

と、一生懸命に書いてある。新人を、第三の人を造ったわけだ。ユダヤ人でも異邦人でもない、第三の人、天国人を。新人は天国人だ。



「母が亡くなりましたので、年賀状は差し上げられません」
なんて言ってくる。私は返事を書くんだ、

「謹賀新年。あなたは、お母さんが天界に往って、それは悲しさは分かるけれども、
天界のお母さんと一つになって、新しい喜びの中に入ってください」

なんて私は書く。びっくりしているだろうな、相手は。そんな返事をくれるやつがいるか
と思つて。そうですよ。いつまでも泣いていたつてしょうがない。

「新しい喜びの世界に、涙を通して虹を見ろ」
というわけです。

私は虹が好きだから。私の号の「天弓」なんて、私が造つた言葉かと思つたら、ちゃんと、
漢詩の中にあるんだ。漢語というものは素晴らしい。そして、私は自分で漢語を造るからね。
便利だよ。

手島さんは聖霊の人なんだけれども、ちよつと、お酒を飲み過ぎたな。彼は自分でもそ
う言っていたから。本当はもう少し生きてもらつてもいい人なんだ。けれども、彼は燃え
尽きた人だから、天界でまた燃えているから、後の連中が一生懸命でやっているわけだ。

『生命の光』を、手島先生が死んだから、やめましょうか
と言つてきたから、

「何を言っているか、あなたたちは。聖霊の雑誌ならば、あなた方は継がなければ
ダメじゃないか」

と、そう言つた時に、みんな喜んだね。それで『生命の光』は続いたんだ。だから、『生命
の光』を送ってくるのに、私の所が第一号なんです。

「小池先生のお蔭でこれは続いたんだから」
と言つて。

無教会は先生が止めると、みな廃刊にする。そうじゃないんだ。私が仆れたつて、『エン・
クリスト』誌は続けなかったらダメだよ。こういう形だつていいから。

●一つの御霊にあつて

16 十字架によりて怨を滅^{うらみ}ぼし、また之によりて二つのものを一つの体となし
て神と和^{やわら}がしめん為なり。17 かつ来^{きた}りて、遠かりし汝等にも平和を宣^のべ、近
きものにも平和を宣べ給えり。18 そはキリストによりて我ら二つのもの一つ
御霊にありて父に近づくことを得たればなり。

キリストにあつて我ら二つのものは、ユダヤ人も異邦人も、「一つの御霊にあつて」とハッ
キリ言っている。

「キリストに在つて」
ということも、



「キリストによって」

ということも、

「一つの御霊にあつて」

ということも、同じことを畳みかけて言っているわけだ。この18節は大事な節です。みんな神様に近づいている。

「お父さま!」

と言えるのは、このキリストによって、御霊に在つて言えるわけです。いい加減で「お父さま」なんて言っているんじゃない。

19 されば汝等²⁰はもはや旅人¹⁹また寄寓人^{やどりびと}にあらず、聖徒と同じ国人^{くにびと}また神の家族なり。

イスラエルに来る、

「旅人、やどり人ではない。もう、神の大家族なんだ」

と。楽しいことを言っているよ。だから、我々はみんな兄弟姉妹です。地上は、いろんなそれぞれの関係はあるでしょう。けれども、天的な現実においては、我々は兄弟姉妹なんだ。それで、私は天的現実でもって、ものを書いたり言ったりするものだから、時々、誤解されるんだよな。誤解する方が悪いんだ。

また、20節が大事なんです。

20 汝らは使徒と預言者との基^{もと}の上に建てられたる者にして、キリスト・イエ

ス自らその隅^{すみ}の首石^{おやし}なり。

という言葉。非常に力強い言葉だね。使徒と預言者。何といっても、旧約の中心は預言者です。「預言書」と言わないで「預言者」と言っている。旧約聖書のことをユダヤ人は、

「律法・預言者及び諸書」

「トラー・ネビーム・ウー・ケスビーム」

と言っている。「トラー」は「律法」。「ネビーム」は「預言者たち」という複数です。「ケスビーム」というのは「書かれたる諸々の書」ということです。旧約のことを、簡単に言う時には、「律法」とだけ言ったり、「律法と預言者」と言ったりする。旧約のことです。ユダヤ人には、「律法」が根底です。「預言者」はあまり言わない。「モーセの律法」、また、それから派生したもの。全く律法の民だよな、ユダヤ人というのは。それを金科玉条にしてこだわっているものだから、キリストは、

「そんなことではないんだ」

と、破ってしまった。だから、十字架に架けられるのも無理もないよな。反律法だからね、キリストは。「反」じゃない、「超」律法なんだ。大変な霊止^{ひと}です、イエスというひとは。これは誰にも分かりはしないんだ、当時は。いろいろ、病を癒されて、民衆は喜んでいたけれども、終いには煽動されて、



「十字架にかけろ！」

なんて言いだした。情けないんだ、民衆というのは。

●隅の首石

「隅の首石」という言い方は、不思議な言い方です。実は、「首石」という言葉はない。みな、「隅」という言葉だ。「隅のまた隅」という言い方なんです。「極端な隅」という字です。旧約聖書にもそう書いてある。詩篇の118篇22節に、

「石師のすてたる石はすみの首石となれり。」(詩篇118・22)

と書いてあるでしょ。

「捨てたる石は極端な隅となつた」

と書いてある。そこには、「おやいし」という言葉はない。

「極端なすみ、すみ石の一番凄いやつ、すみの最たるもの」

という意味です。「石」という字はない。「その捨てたる石は」とあるものだから、そこで「隅のおや石」と訳したんだけど、旧約でも新約でも、ギリシャ語でも、こここの所に「石」という字はない。「極端なすみ」という字です。

ギリシャ語では難しい言葉だ。「アクローグノーニアオス」という言葉だ。「極端なもの」という意味の「アクロス」という言葉と、「隅」という字「グノーニア」からできた言葉で、

「極端な隅、隅の極端なもの」

という意味です。それで、「隅のおや」までで、「石」という言葉はない。ヘブライ語では、「エベン ハッピーナー」という。「エベン」「石」という言葉はない。とにかく、「極端な隅」「隅の首」、それがギリシャ語の本当の字です。「石」はない。だけれども、それは「石」のことを言っている。そういうわけです。

私にとっては、母も兄貴も、正に私の「隅の首石」なんです。もちろん、信交ではキリストですよ、キリストに相違ないんだけど、個人的な気持の中では、この兄と母がいなければ、私はいないわけです。お父さんは、まあ、関係ないんですが。ちょうど、キリストのヨセフみたいなものだ。ヨセフなんてお父さんは関係ないんだ。「関係ない」なんて言ったら悪いけれどもね。

とにかく、皆さんもいろいろ、個人的な意味で、

「この人は私の、相対的な意味では隅の首石だ」

という人があるでしょう。信交の世界では、もちろんキリストが私たちの「隅の首石」です。それは、その上に建っているのが、預言者と使徒。我々の信交の構造はそうなっている。だから、預言者と使徒のものはよく読まない。「隅の首石」はキリストだから、福音書です、何といつても。全聖書の中心は、何といつても、福音書です。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ。福音書を読んで、降参しなければダメです。だから、



「聖書は教訓^{おしえ}ではない。ドラマだ」

と、ハッキリ書いたでしょ。「教え」だなんて思ってたで読んだって、いつまでたっても始まらない。

21 おのおのの建造物^{たてもの}、かれに在りて建て合せられ、いや増しに聖なる宮、主のうちに成るなり。22 汝等もキリストに在りて共に建てられ、御霊によりて神の御住^{みすまい}となるなり。

我々は神様の住まい、幕屋である。人間は幕屋だからね。

相対的に、我々の生涯を顧みて、

「ああこの人がいたので」

というような人がいるでしょ。そういう人には感謝の念をいつまでも忘れてはいかん。

そして、女の方は――私の母は私にとつてそうですが――お子さんがあろうがなかろうが、女の方は第二の国民の大事な「隅の首石」ですから、それだけの自覚は持っていたきたい。何といつても、女性というのは、小さい人はより頼むからね。兵士でも死ぬ時は、
「お母さん!」

と言うんだ、「お父さん」とは言わない。

これで、2章の骨子は学んだつもりですが、キリストは「隅の首石」であると同時に「親和力」である。すべてを包摂してしまうところの素晴らしい「親和力」である。それから、我々は天界の人間だ。

「天の処に坐せしめられたまえり」

と。地上にありながら、天上人だ。

私は人間でなければ、鳥になりたい。天と地は一体、どこまでが天で、どこまでが地だ、と言ったって、天と地はつながっている。地面まで天は来ているでしょうが。

「大空は大地に接吻している」

という言葉がある。そういうわけだ。だから、「二つ」になっている。そういう、時空を掌握しているような魂にならなければダメですよ。

もう僕は、不思議な夢を見て、しょうがないね。楽しい。もの凄い現実だ、夢の世界は。ボケるところの騒ぎじゃない。いよいよ、冴えてきた。本当だよ。これは聖霊の力ですよ、何といつても。その御霊の世界をいい加減にして、何が「信仰だ」なんて言って、ちゃんちゃらおかしいよ。本当だよ。おしまい。

